

永遠 熱情を支えた銀盤

昨年死去の大須リンク・江口さん

ソチ五輪の開幕まで、1カ月。注目される女子フィギュアの日本代表には、浅田真央選手(23)ら愛知県ゆかりの3人が選ばれた。その活躍する姿を誰よりも楽しみにしていた男性が昨年、惜しまれながら亡くなった。

「大須から世界で活躍す たいい」
る選手を、一人でも多く育 大須スケートリンクの愛



新装したリンクで記念撮影する江口晋二営業部長（前列右から2人目）と職員ら＝2013年7月13日、名古屋スポーツセンター提供

「選手を世界に」最後まで力



称で知られる名古屋スポーツセンター（名古屋市中区）の営業部長だった江口晋二さんの口癖だ。胃がんを患い、昨年10月26日に53歳で帰らぬ人となった。

「晋さんは、いつも見え ないところまで人のために尽くしていた」。そう話す同僚の堤孝弘さん(37)のように、リンクで働く社員の半数は、江口さんを慕って入社したという。

準備に駆け回った。胃がん摘出手術後、転移が見つかっていた。1カ月のうち2週間をリンクで過ごし、残りは治療に専念するという生活が続いた。

アルベールビル五輪銀メダリストの伊藤みどりさん(44)らが練習した大須で、選手のスケート靴の調整や一般客向けのイベントを企画してきた。アイスホッケー選手を引退後、チームの監督をしながら大須を見守り30年。選手や社員からの信頼は厚かった。

五輪を目指すフィギュア選手から一般客まで年間約15万人が利用する大須。間近で一流の演技が見られる利点の一方で、選手と一般客が接触する危険性が長年の悩みだった。

倒れてから3カ月後、名古屋市内で営まれた通夜と告別式には、約800人が参列した。海外から駆けつけたアイスホッケーの教え子もいた。浅田選手からは大きな花輪が贈られた。伊藤さんは「いつまでも、江口さんは大須とともにあると思う」と悼んだ。

「江口さん、お願い」。大須でスケートを習い始めたばかりの浅田選手から調整を頼まれ、スケート靴の刃を磨く江口さんの姿を、社員は覚えている。

そこで、リンク(56歳×26歳)の中心エリア(36歳×13歳)を青くし、フィギュア選手がスピンやジャンプの練習ができる場所とした。周囲の白い部分は一般客優先だ。

全国的にも珍しい試みだった。江口さんは、ルール作りのための打ち合わせや

(小林直子)